

現場に足を運ぶことの大切さを学ぶ

～実践をするだけでは分からないことがある～

四條畷学園短期大学 准教授 香月 欣浩



私は小さな頃から、子どものことが大好きでした。(自分も子どものくせに…)

そして念願の小学校教員(美術専科)となり15年経過したある日、理事長に「短大の先生になってほしい」と言われ、青天の霹靂状態で短大に職場を移しました。短大には保育学科がありましたので、小学校教諭の経験を活かしてほしいとのことでした。確かに子どもが好きなので良かったのですが、小学校教諭だったため、肝心の乳幼児の支援をしたことがありませんでした。そんな教員が保育学科で造形の指導をしているのか? いや、いい訳がない!(反語)

そういうわけで、附属幼稚園の園長に「子ども理解を深めるために、ぜひ私に幼児対象のアートクラブをさせて下さい。」とお願いをしました。すると「いいですよ!」とあっさり受け入れて下さいました。

そして、私が幼児の支援に慣れていないことへの配慮から、対象年齢は5歳の年長さんがいいだろうという事になりました。

初めてアート活動を行なった時の感想は、子どもたちに「言葉が通じない」という事でした。全く通じないわけではないのですが、いつも使っている言葉では、スムーズにいかないのです。

例えば、「円になって座りましょう」と子どもたちに言っても、ポカン…と私の顔を見つめているばかり。困ったなあ〜と思い、そこにいた教頭先生に視線でSOSを送りました。すると教頭先生の一言で、子どもたちは、あっという間に、大きな円になって座ったのです。なんと言ったと思いますか？

「はい、みなさん、隣のお友達とお手手をつなぎましょう」

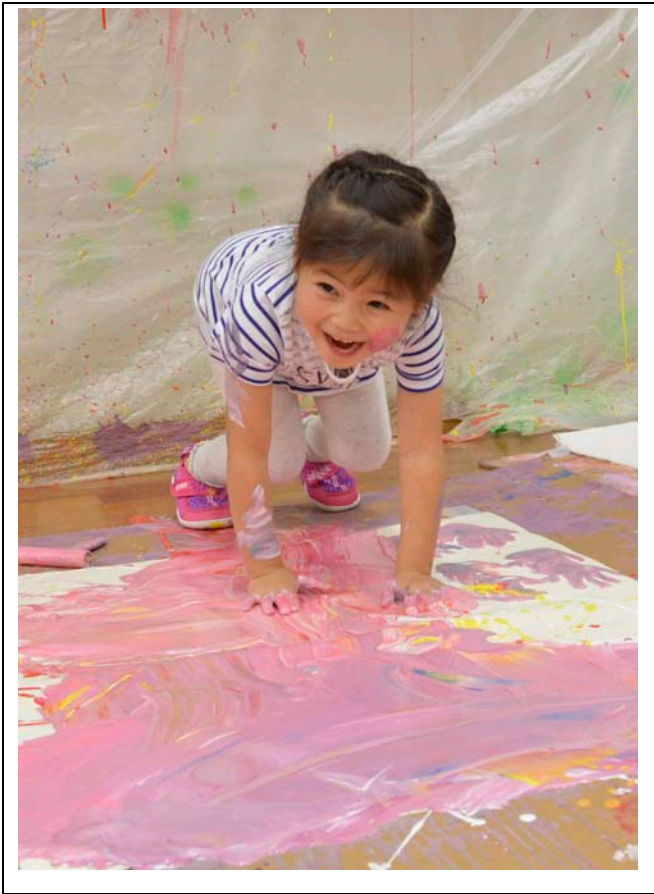
たったこれだけだったのです。私は、柔らかいお豆腐で頭を強く殴りつけられた気分でした。

えええええ〜えええええ〜？それで？それだけで動けるの？！私は自分の無力を感じるとともに、これは、やはり勉強が必要だと確信しました。

子どもたちに円になって座ってもらえないような大人が、子どものことを知っているような顔をして、保育学科の教員をされていてはだめだ。この気持ちを持って子どもたちのアートクラブでの活動を支援してきました。その間たくさんの子どもの姿を見せてもらい、勉強させてもらいました。もちろん学んだことや子どものエピソードを学生たちに紹介し、子ども理解に役立ててもらったと思っています。

そしてアートクラブを始めて11年。今、気づいたことがあります。活動の支援をしながらでは、じっくりと腰を据えて子どもたちを観察することはできないという事です。





実践によって学ぶことは、もちろんたくさんあります。しかし1人の子どもを、その時間ずっと見ていることはできません。そこで私は今年度、子どもの造形活動は2回だけにとどめ、保育現場に足を運びました。徹底して子どもの姿を観察することに努めたのです。

そして、子どもたちの驚くほど自由な表現場面、子ども同士の遊びから表現が始まった場面などを、何度も目にして、支援していた時とは違う面白さを感じてきました。

「子どもってこうなんだ！」という新たな発見の連続だったのです。もともと子どもが好きな私ですから、この観察の時間は研究というよりも趣味・娯楽のようでした。

活動中に子どもの笑顔を見ると、「よかった」と安心します。そして、真剣な表情を見ると私は涙が

出てくるのです。

なぜでしょう？オリンピックの選手が試合中にするあの真剣な表情を見た時と似ています。人が一生懸命になっている姿は、私の心に強くなにかを訴えてきます。

これが「表現の力」だと思います。

子どもたちの作る作品や、オリンピック選手の成績も価値がありますが、それは結果です。

そこに至る過程で見せる姿が、まさに生きたライブの「表現」なのですね。

だから、その姿を見ると私は涙が出てくるのだと思います。

これからもハンカチを手に握りしめ、子どもたちの造形表現現場に足を運び、研究（趣味・娯楽）を続けていきたいと思っています。



香月 欣浩